# 本気の恋。

メイソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本気の恋。

【Ｎコード】
Ｎ０２３０Ｚ

【作者名】
メイソン

【あらすじ】
社会人２年目のサチコは本気の恋をしたことがない。
自分が軽い女だってのは承知の上！！
ある日、合コンで出会った『彼』とは一夜を共に過ごすがその記憶がない！？
何があったのか詳しく知らないまま『彼』との関係は続いていく。

## Ｓａｃｈｉｋｏ　Ｓｉｄｅ（前書き）

小説初挑戦になります。
至らないとこばかりですが楽しんで読んで頂けたら幸いです。

オリジナル作品になりますので転売禁止です。

## Sachiko Side

短大生を卒業して2年。
小会社の事務員をしているこの物語の主人公こと、大島サチコ（22）。

仕事が終われば、同期で入社した仲の良い佐野リョウコとご飯に行くか飲みに行くかの日々を送っていた。

サチコの容姿は誰もが「可愛い」と思うような整った顔。
身長も小さく小柄。
サラサラで綺麗に巻かれた栗色の髪の毛。
男も外見重視で近づいてくる人も複数いるようだ。
会社の中でも一際目立つサチコは男性社員からはウケが良かった。
逆に女性社員からのひがみも耐えなかった。

サチコはサバサバとした性格で言いたいことはハッキリ言う。
そういう性格だからこそ社内虐めなどは決して無かった。

「サ〜チコ♪」

ご機嫌でサチコの名前を呼んだのはリョウコだった。
リョウコとは部署は違うので唯一、食堂か帰りの更衣室でしか会社では会わない。

ここは会社の食堂。
ご飯を食べながらサチコはリョウコの方を見た。

「先週の合コンあったでしょ？」

「うん。楽しかったよねー！」

「サチコ、本当に覚えてるの？」

そう聞かれてサチコはキョトンとした。
何か言いたそうなリョウコ。
リョウコには何でもお見通しなんだ。
私がお酒が入ると記憶が曖昧に・・・
いや、ぶっ飛ぶことを知っているからだ。

「私、何かマズイことしちゃった？」

「ううん。合コンに来てた赤坂さんと良い感じだったし、帰りは赤坂さんサチコを送ってくれたんだよ。」

アカサカさん・・・？

サチコは本気で記憶が飛んでいたようで『アカサカ』という名前も初めて聞いたような気がした。

私・・・また何かやらかしちゃったのかな・・・？

・・・―キーン　コーン　カーン　コーン

仕事の始まりのチャイムが鳴り、急いで自分のデスクに戻るサチコ。
仕事に手をつけようとしたけど、リョウコの言葉が頭をよぎる。

『赤坂さんと良い感じだった』
『私を送ってくれた』

自分は覚えていないのに人から聞くには変な感じだ。
しばらく仕事が手につかず、その時の記憶を辿ってみた。

「・・・・・・ちゃん！さっちゃん！大丈夫？」

私を呼ぶ声。
聞こえた声は低くて大人びた声の男性。

「酔い醒めた？」

私を心配する声。
とても優しい口調だった。

その合コンの日はいつもより飲みすぎて完全にお酒に飲まれたという表現が合っていると思う。

「気持ち悪くて・・・は、吐きそう・・・です・・・」

「え！？ちょっと待って！！俺ん家すぐ近くだからそれまで我慢出来る！？」

それからは飛び飛びの記憶しかなくて思い出すのもやっとだった。

知らない人の家。
部屋は男の人の匂い。
ベットに少し休ませてもらった私。

・・・―そして、介抱してくれたアカサカさんという人の腕に抱かれている。

顔はやっぱり思い出せないけど、彼のサラサラの黒い髪の毛。

綺麗な鎖骨。

人間って変なとこ覚えてるもんなだな、と少し関心したサチコ。

飛んだ記憶を辿った結論。

私、また酔っ払ってやっちゃったんだ・・・。

・・・『アカサカさん』。

リョウコが言った名前に妙に頭に焼きついた。

## Sachiko Side

仕事が終わり更衣室にはリョウコがいた。
リョウコは明るく「お疲れ～！」と声をかけてくれた。
私にとってリョウコは同い年ながらも頼れるお姉さん的存在。
私と違ってお酒も強い。
ましてや酒豪と周りから言われるほどの強敵だ。

会社を出てからリョウコとご飯を食べに行く。
それが日課のようになっている。

今日はイタ飯を食べながらガールズトークに花が咲く。

「サチはまだ恋出来そうにない？」

リョウコは心配そうに私の顔を覗き込んで聞いてきた。

「うん。いい感じの人もいないしね」
私は迷うことなく返答する。

そう・・・
私は『本気の恋』が分からない。
いや、分からなくなってしまったといった方が正しい。
付き合った人はたくさんいるけど、本気かどうか分からないまま別れることが多かった。

男友達はたくさんいる。
合コンで知り合った人が大半だけど、何かピンとくる人はいない。
それに、男から見て私の評価は最悪。

『遊んでそう』
『チャラそう』
『すぐヤれる』

素晴らしい三冠だこと。
周りにどう評価されようがその最悪な評価が当たっているのも事実。
その評価を知っているからこそリョウコは私のことを心配してくれているのだと思う。

「ま、なるようにしかならないよ♪」
リョウコの心配を押しのけて、シラっとそう言った。

“いい人と出会えるといいね”
そう言ってくれたリョウコは本当に優しい。
私が男だったら間違いなくリョウコに惚れているだろう。

それから、リョウコとは理想の男性のタイプや恋愛感について色々話した。
リョウコとは気が合うしお互いの意見や考えを言い合える。
面白可笑しく冗談交じりの会話も日常茶飯事だ。

でも、やっぱり過去のことは言えなくて・・・
少し心が痛くなった。

「赤坂さんって・・・」
リョウコの口からいきなり出た名前にピクッと反応した。

「サチのこと凄く心配してたよ」

リョウコの言うことだから間違いや大げさではないことは分かる。
「う、うん。酔ってたけど少し思い出したよ！顔は思い出せないけど」
リョウコはビックリして私に向かって立ち上がりそうになりながら言った。
「えぇー！？あんなイケメンの顔忘れるなんてサチ信じられない！！」
イ・・・イケメン？
リョウコはアカサカさんのことを必死になって説明してくれた。
合コンで1番人気があったこと。
周りに気遣い出来る人ということ。
高身長でサラサラの黒髪。
年は私たちよりも5つ上ということ。
酔っ払って記憶がないのはこれが始めてではないけど、
そこまで目立つ人をどうして覚えていないのか自分でも不思議なくらい。
しかも、合コンの後にあんなことまであったのに。
相当酔っていたのか・・・
私は反省した。
合コンの後のことはリョウコには言えずにいた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0230z/

---

本気の恋。

2011年12月1日00時48分発行